

[ ブーケ ]

# bouquet



復興応援企画  
人とまちと、  
その先と—

## 東日本大震災10年

リアス・アーク美術館から伝える気仙沼市の現在



気仙沼湾を望む(2020年9月)

「復興応援企画」として被災地の現在をお伝えする本連載の第4回は、宮城県気仙沼市のリアス・アーク美術館からお届けします。美術館の常設展「東日本大震災の記録と津波の災害史」には、被災された学芸員の方々が自ら撮影した写真や、収集した被災物が展示されています。この企画の中心となり、災害の記憶を残すために活動を続けているのが、副館長で美術家でもある山内宏泰さんです。現在の気仙沼市の様子や美術館の運営で大切にされていること、災害の備えとしてすべきことなど、さまざまなお話を伺いました。

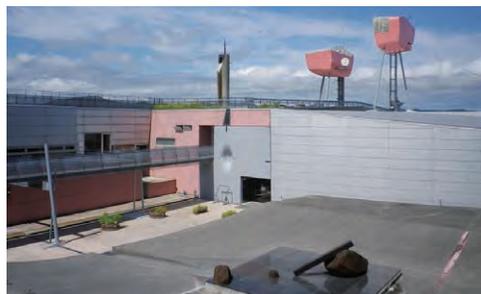


山内宏泰(やまうち・ひろやす) | リアス・アーク美術館(副館長/学芸員)

1971年、宮城県石巻市生まれ。1994年、宮城教育大学中学校美術教員養成課程卒、同大学院入学(リアス・アーク美術館勤務のため9月中退)。常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」企画担当。美術家としても活動しており、舞台美術家、衣装家として多数の舞台に参加。

スローフード気仙沼理事。2012～2018年、人間文化研究機構国立歴史民俗博物館共同研究員。2013年、気仙沼市東日本大震災伝承検討会議委員。2014年、気仙沼市東日本大震災遺構検討会議委員及び遺構施設展示アドバイザー。2017年より気仙沼市復興祈念公園施設検討委員、一般社団法人気仙沼まちづくり支援センター理事。

2004年宮城県芸術選奨新人賞受賞(美術・彫刻)。2017年棚橋賞受賞(日本博物館協会)。著書に山内ヒロヤス『砂の城』(近代文藝社、2008年)がある。



リアス・アーク美術館

「圏域住民への質の高い芸術文化に触れる機会の提供」と「住民の創作活動や発表の場の提供」を通じ、美術的な視点から個性豊かな圏域文化を創造しようとする生涯学習施設。東北・北海道を一つのエリアと捉え、美術をはじめとする芸術・文化を継続的に調査、研究することを基本方針とし、常設・企画事業を展開している。

設計は、早稲田大学理工学部建築学科の石山修武研究室があたり、建物内部は総3階建てに屋上庭園を有し、総面積は4601.22㎡。1995年日本建築学会賞受賞。

■宮城県気仙沼市赤岩牧沢138-5 (TEL 0226-24-1611)

■開館時間：午前9:30～17:00(最終入館 16:30) ■休館日：月・火・祝日の翌日(土日を除く)

## 過去を遺物にしないために

**ブーケ編集部 (以下、b) :** 2021年は、東日本大震災から10年がたつ年です。現在、どのようなことを感じますか？

**山内 :** 本来であれば、いろいろなことを感じたり、考えたりしてははずです。しかしコロナ禍では、そちらに頭を切り替えていかなければなりません。例えば、震災被災をしていた中で「できないこと」はありましたが、「やってはいけないこと」という生活への制限はありませんでした。その点で美術館という組織としては、コロナ禍で受ける影響は非常に大きいものです。2020年度の12月末までに計画していた事業は全て中止・延期となり、常設展を開けながら、当館所蔵のコレクションを使用した代替の企画を行いました。2021年は予定していた事業を全て行うつもりです。

**b :** リアス・アーク美術館では、美術教育の支援を目的とした、小・中学校、高等学校や学習施設への「出前授業」を行っています。どのような内容ですか？

**山内 :** 学校には当館をどんどん活用していただきたいのですが、近隣の公共交通機関がほとんどないため、地元の学校はバスをチャーターしないとこちらに来ることができません。そのため、私たちが学校に出向いて、アウトリーチ活動として絵画や工作から地域の学習まで幅広く、講座を行うものです。最近では、学校現場で活用できる教材の開発もすることになりました。

**b :** どのような教材を予定されていますか？

**山内 :** 子どもたち向けのワークショップの動画を撮影し、学校に使っていただくという計画があります。工作をしたり絵を描いたりする正しい手順を紹介したものです。もともとこの活動は私の専門で、アイデアはたくさんあります。「行かなくても楽しめて、役に立つ」という美術館像を新たに構築するために、コロナ禍に関係なく以前から進めている計

画です。もちろん、最終的には美術館に来ていただくことが目標で、「動画に出ていたあの人に会いに行こう」「映像で見た作品を実際に見てみよう」と思ってもらいたいですね。

**b :** リアス・アーク美術館の常設展は印象的です。東日本大震災の写真や被災物の展示は、山内さんはじめ学芸員の方々が自ら集めて、添える文章も書かれたそうですが、当時はどのような思いでおられたのでしょうか。

**山内 :** 限られた少ない装備と移動手段しかない中、私たちは自分たちの住んでいた場所を歩き、写真を撮り、被災物を収集して懸命に記録を残しました。そうしてなんとかかき集めたものを、タイムカプセルのような保管をして終わらせることは絶対にしたくない。すぐにでも公開してみんなが共有できるようにしてはならない。そう考えて作った展示でした。これらは、2011年から2013年にかけて構築された思考の塊です。言葉遣いや文章を変えたいということはありません。だけど、あえてそのまま残していきたいです。

**b :** 美術館として、大切にされていることは何ですか？

**山内 :** 当館が大切にしているのは、過去を遺物にしないことです。過去と現在という点と点の間に存在する線を、見る側に認識していただけるように注意しています。私たちが過去を遡るとき、現在とのつながりを感じられるのは戦後からではないでしょうか。しかし、東日本大震災を考えるためには、明治までは遡って学ぶ必要があります。そこには三陸沿岸部は津波常襲地域であること、震災が起きる理由、この地域が津波に対して脆弱化してしまった原因など、さまざまなヒントが見えてくるのです。未来のために必要なのは、古い時代の出来事を語り継ぐことだけではありません。重要なのは過去を知り、切れ目なくつながる因果を理解し、今現在の物事と向き合う姿勢です。



「東日本大震災の記録と津波の災害史」(常設展示)

## 東日本大震災

**発生日時:**2011年3月11日14時46分頃発生。 **震源及び規模(推定):**三陸沖の宮城県牡鹿半島の東南東130km付近、深さ約24km、マグニチュード(M)9.0。  
**震度:**宮城県北部で最大震度7が観測された他、宮城県、福島県、茨城県、栃木県では震度6強を観測。北海道から九州地方にかけて、震度6弱から震度1の揺れが観測された。津波:3月11日14時49分津波警報(大津波)発表。[観測値と最大波] えりも町庶野3.5m、宮古8.5m以上、大船渡8.0m以上、釜石4.2m以上、石巻市鮎川8.6m以上、相馬9.3m以上、大洗4.0m ■死者15,899人、行方不明2,527人。

**参考:**・内閣府防災情報のページ「緊急災害対策本部とりまとめ報」より(2020年3月10日)・警察庁緊急災害警備本部広報資料より(2020年12月10日)

# 10年前と比較した気仙沼の現在

**b:** 山内さんは、気仙沼市東日本大震災伝承検討会議委員など、復興に関わる活動も多く行われています。復興について気仙沼の方々はどのような思いをしているのでしょうか？

**山内:** 日本での災害復興とは、関東大震災での帝都復興事業でつくられた一つの型であり、災害をきっかけとして町自体を刷新開発することを目標としています。ですが異例のケースとして、2004年の新潟県中越地震があります。山古志村(現在は長岡市に合併)は土砂崩れで大変な被害に遭いましたが、山古志村の多くの方々は、復旧のために住民主導で帰村しました。その理由は山古志村の文化、錦鯉や1000年の歴史を持つ闘牛を守るためだったそうです。災害に強い町になるための改善は必要ですが、気仙沼の多くの人々も、地域文化を変えてしまわないかたちでの災害復旧を望んでいました。しかし、防潮堤に何兆というお金が充てられても、地域文化を守るための予算はほとんどありません。町は文化でこそ変化します。

**b:** 住みやすさは出てきましたか？

**山内:** 生活者としては、便利さは感じています。三陸自動車道が整備されてきており、この辺りから仙台まで車で行くのに、以前は片道2時間半~3時間かかったところを、今では2時間かかります。一方でJR気仙沼線は復旧されず、その代わりにBRT(バス高速輸送システム)が走っていますが、BRTでの移動はとても時間がかかります。若いうちはよいですが、年をとってくと不安な面はありますね。鉄道が失われて、生活者が果たしてほんとうに日常を過ごし

やすくなっているのかは分かりません。

**b:** 10年前と比べて、町についてどのように感じますか？

**山内:** 自治体は町がよくなるようチャレンジしてきたわけですが、想定していたほどの成果は上がっていません。大きく変わったのは、風景です。気仙沼には町を見下ろせる安波山という高い山があり、そこからの景色が気仙沼の象徴的な風景でした。その中に巨大な橋が2つ増えました。気仙沼湾横断橋と気仙沼大島大橋。気仙沼大島から本土に、船だけではなく車で行けるようになったことも大きな変化です。日常的な風景の変化としては、巨大な防潮堤に異様さを感じます。防潮堤のコンクリートがまだ新しく、朝日や西日を浴びるとピカピカと光るのが目につきます。山などが切り開かれて道路ができたり、切り通しの法面がコンクリートで固められたり。風景の中にコンクリートが増えました。

**b:** 街並みが大きく変化したのですね。

**山内:** 普通の街には、木造、トタン、鉄筋コンクリート、新建材など、たくさんの素材が混在します。しかしこの10年、急ピッチで建てられた商店街や住宅街の建築物には、同じような素材が使われています。同じ時期にすべてがつけられた街は現実味がなく、何と言えいいのでしょうか、CGみたいですね。もともとの気仙沼は開発が進んでいない港町で、潮風が当たるためトタンはボロボロでした。しかし、そのような古くからの建物があり人が暮らしている世界には、一つの美しさが存在していたと感じます。



常設展示。圏域の文化資源を見つめなおし、「食」を軸として歴史、民俗資料を公開する「方舟日記」(写真左・中央)と所縁の作家を中心に紹介する「収蔵美術作品展」(写真右)

# 防災減災で大切なこと

**b:** 災害に備えてどのようなことを準備すべきでしょうか？

**山内:** まず、私たちが被災して実感したのは、何をやっても助からないときは助からないということでした。逆に、何もしていなくても助かるときは助かる。リアス・アーク美術館の運営母体である気仙沼・本吉地域広域行政事務組合は広域消防を主にやっているため、9割が消防署員です。私も面識があった消防署員が震災で10人も殉職しています。全員がプロですが、彼らは地域住民の避難誘導をしたり水門を閉めに行ったりする中で、逃げ遅れてしまった。あるいは、逃げるよりも人を救うことを優先したと言わなければならないでしょうか。一方で、何も知らなかったけれど、偶然その日は自宅におらず、家は跡形もなく流されたけど自分は助かったという方も多くいます。準備や知識があってもだめなときはだめで、助かるときは助かる。しかし同じ条件下で大災害に遭遇したとき、助かる確率が高いのは知識のある人です。自分が暮らしている場所について、洪水や土砂災害、巨大地震が発生したときを想定し、一つ一つ確認しておく必要があります。そのようなことをされていますか？

**b:** 避難場所の確認と、防災用品の備えだけでしょか。具体的な想定はしていませんでした。

**山内:** 一度でもいいから、災害時のことを具体的に想像して、ゾツとしておくことです。当館では「防災減災教育」という言葉を使いますが、私たちは「減災」という言葉を必ずつけています。「防災」なんて甘いことを言っていられないからです。災害時、防ぐことが不可能なことは多々起きます。マンションの上階だから大丈夫と思っても、マンションの杭が岩盤まで入っておらず傾いてしまった事例もあります。その場所が水没すると電気によって火災が発生し、火災が発生するとヘリポートがあったとしても、ヘリコプターの救助が来られないことだってあるのです。



「東日本大震災の記録と津波の災害史」で展示されている写真と文章は、山内さんをはじめ学芸員の方が撮影し書きつづったもの



気仙沼市鹿折地区（2020年9月）

**b:** 安全だと思っている場所でも何が起きるか分からないのですよね。

**山内:** 津波の直撃は免れても、その後72時間以内に別の場所に避難して何かを食べることができなければ、例え無傷だったとしても命を落とすおそれがあります。東日本大震災では、津波の被害を免れても低体温症で亡くなった高齢者は多かったのです。減災に大切なのは、防げないという前提で、最悪何が起こるのかを考えること。各家庭でその準備をすればいいと思います。大人がそれをできなければ、子どもを守れません。どこの自治体でも災害のハザードマップを出していますから、土砂災害、洪水、地震津波火災、それらにしっかり目を通しておくことです。

**b:** 今からでもハザードマップを読み込もうと思います。

**山内:** ただ、ハザードマップは見方を知らないという意味がありません。例えば津波のハザードマップは、海の近くは確実に浸水するので真っ赤です。内陸に入ると色が変わりますが、いちばん危険なのは黄色から緑の辺り。赤やオレンジの地域の方は危険だと分かっているのですぐに逃げますが、やや陸側の黄色エリアでは津波浸水深が約2メートルだったりすると、「2メートルなら2階にいれば大丈夫」と考えがちです。でも実は2メートルの水面の上に物が流れてくるわけで、2階にいても流されてきた家や車が突っ込んでくる。しかも実は、2メートルくらいのところが物が最も残存しやすく、漂流物が堆積した場合大火災になる可能性があります。水がある場所はそれほど燃えませんが、下半分が水に浸かって上半分が倒壊した建物は非常に燃えやすい。気仙沼の鹿折地区がそのような場所で、亡くなった方の死因は津波による溺死と火災による焼死に二分されました。正しく状況を把握するための勉強は必要です。



## 芸術や文化が町の発展を支える

**b:** 山内さんは美術家としても活動されています。災害に対して芸術ができることについて、どのようにお考えでしょうか？

**山内:** 芸術にできることは、たくさんあると思いますよ。ただし、冷たい言い方になりますけれど、災害発生後から2週間ぐらいは芸術家には役割がないと思います。でも、人が落ち着いて1か月もすれば、音楽家の演奏は喜ばれるでしょう。1年後ぐらい、人々がものを作り始める頃になると美術家が必要とされるかもしれません。被災した方がご家族を亡くされて写真も何もかも流されてしまったときに、美術家のご家族の顔を見て話を聞きながら描けば、亡くなった方を絵画で再現できると私は考えています。人の頭の中のイメージを可視化する力があるのが美術家です。人の記憶に頼らなければ残すことのできないものを伝えていこうとするならば、美術家は役に立つかもしれません。それに、美術家と音楽家が協力すれば、さらに人々の感情に訴えかける作品を生み出せると思います。

**b:** 映像や舞台など、さまざまな芸術によって成り立つものは人々に受け入れられやすいですね。

**山内:** 芸術の技術や能力は、災害が起きた瞬間、あるいは直後に役に立つとは言い難いですが、そこから人が再び動き出していくときに、絶対的に必要なものです。芸術や文化を抜きに、物や町を生み出すことは危険なことだと思います。目に見えないものの大切さは今さら言うまでもなく、誰もがその必要性に気付いているはずですが。震災後の復旧に際して、芸術や文化の必要性に気付いている方から数多くの相談を受けました。「ただ何かを新しく作るだけではない。何か、感覚的なことを処理してからでないと、絶対に間違ふ気がする」と。私は、芸術は必要なものだと思います。

**b:** そのお話を伺い、音楽に携わることを大切にしようと考えました。リアス・アーク美術館の今後の取り組みについて、展望はありますか？

**山内:** 動画を使用した取り組みです。海外のお客さまにはいつも「外国向けの動画配信などはしていないのですか？」「英訳をつけて発信すれば、日本に来る人たちがたくさん訪れるはず」と言われてきました。私自身2020年夏まではリモートでのやり取りは行っていませんでしたが、冷静に考えてみれば、リモートの活用は私たちが子どもの頃に夢見た、テレビ電話が使えるSFの世界。それは使わないと。美術館や博物館の資料の役割は、コミュニケーションツールを提供することです。出前授業やワークショップは以前のように行うべきですが、これからはインターネットを積極的に利用して、時空を超えたコミュニケーションの場などを提供していけたらと思います。

**b:** 場所を問わずに多くの人々がリアス・アーク美術館を楽しめたらすてきですね。

**山内:** 気仙沼市の小学校でも4月以降には、生徒一人一人がタブレットを活用した学習が当たり前になるそうです。今の世の中、私たちは物事を柔軟に考える必要があります。使ったことのないツールを使用して、子どもたちがバーチャルの世界を体験するのは悪くはありません。ただ思うのは、好きなことを一つに絞らないでほしいということです。タブレットを使用して絵を描くことが好きなのであれば、実際に紙に鉛筆と絵の具で描いてみる。そういう経験を積んでほしいです。多種多様なことを行い、考える。それが大切です。

**b:** 山内さんがさまざまな体験を経て、子どもたちに伝えたいことは何ですか？

**山内:** 自分が知らないことにも積極的に目を向けてほしいです。もしかしたら、そこにとてもおもしろいものや重要なことがあるかもしれません。知っているか知らないかで、そのあとの選択が変わってきます。若い頃に知らないことがたくさんあるのは当然ですが、それだけで物事を選択し判断してしまうと、偏った世界の中に入ってしまう。今の時代は、いろいろなものに触れる機会を自らつくっていかないとはいけません。子どもたちの周りにいる私たち大人が、それをしっかり伝えていけたらと思っています。

の校長先生  
講話



本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第8回は、福岡市立曰佐小学校の前校長である西村幸司先生が、卒業式前日の修了式で語ったものです。音楽を通して多様な感じ方を大切にしてほしいと願ってこられた西村先生。卒業する子どもたちに向けて、自分らしさを大切にすることは何か、一人一人に問いかけながら伝えたお話です。

西村幸司（にしむら・こうじ）

第8回 西村幸司 先生 前 福岡市立曰佐小学校 校長  
元 九州音楽教育研究会 会長

## ホンモノの自分らしさ

フーガの曲の構成のすごさを知り感動していた小学校6年生のときに、鈴木洋先生が奏でるバッハのゴルトベルク変奏曲を聴く機会があった。言葉では表現できないが、心がさわさわした感じがした（小学生の自分はそう感じた）。音楽は人の気持ちを揺さぶることができるものだ実感した瞬間であった。



グレン・グールド  
1932 - 1982

そして数日後、この曲を聴こうとレコードを買った。グレン・グールドの演奏。衝撃だった。同じ曲でも演奏する人でこうも違うのかと驚いたと同時に、それがそれぞれ認知されているすごさにも驚嘆した。

それまでの人生、「こうあらねばならない」「過程は違っても最後の正解はこうである」ということがほとんどであった。このことに長らく疑問をもち、窮屈だと思いながらも、解が一つである真理を追究することの面白さを感じながら生きてきた自分にとって、幼少から接してきた音楽は、多様な解釈が認知されるもの。

そこが音楽をはじめとする芸術のある種の価値であると考えている自分があった。

理系人間であったが、音楽を通して多様な感じ方を大切にできる子どもを育て、そういう社会を実現するための一端を担いたいと考え、音楽教師になった。しかし、初任の中学校は対教師暴力が日常化するなど、生徒指導上の問題が山積しており、生徒を管理するような画一的な生徒指導が一義であり、それでよいのかと自問自答しながら現実にはそうすることが現状打破には必要だと納得させつつ、日々を送っていた。

管理職になり、ようやく多様性が大切にされる時代を迎え、今こそ、次代を担っていく子どもたちに必要な力は、多様な価値をお互いに認め、個性を生かしていこうとする意欲や態度、あるいはスキルを身につけることであると考え、学校運営、学校経営の柱の一つとして掲げるようになった。

ここでは、令和元年度（平成31年度）の卒業生に修了式で話したことを紹介したい。

皆さん、おはようございます。

いよいよ明日が卒業式ですね。今年は、在校生や来賓の方の参加が叶わない、そして、式自体の内容も簡素化された中で行わないといけなくなり残念な気持ちがあると思います。

校長先生がこの学校に着任したのは皆さんが2年生の頃でした。まだまだ幼稚園の延長のような子もいました。皆さんが入学したときも中学校長として来賓参加していましたから(入学式の写真を提示し振り返りながら)、今の皆さんの姿を見ると成長の過程が思い出され、感慨無量です。

さて、これまで何度となく皆さんの前でお話する機会がありましたね。学校でもおうちでも大切にしたいことを二つあげていました。どういうことでしたか？

一つ目は……

(子どもから)「自分らしさを大切にすること」

二つ目は……

(子どもから)「人の気持ちを考えた言動をすること」

そうでしたね。

そして、高学年になってからは、三つ目として「自身でとらえている自分らしさがホンモノ(あえてカタカナで示していました)であるかということ、相手を傷つけたり間違ったことをしたりしていないかを、客観的にもう一人の自分が見てチェックしようとする事」を大切にしてほしいとお話してきました。



講話を語る西村先生





音楽の授業にて

小学校の時期は、自分らしさを大切にすることを実践しながら、自分にとってのホンモノを探るために多様な経験をする場でした。中学校は、こうかなと芽生えた自分らしさを追究し、それに自信をもち確かにする場、さらにその後大半の人が進学する高等学校、専門学校等は、自分らしさを追究しホンモノとして実感し、それを生かした生き方をめざす場です。そういう世界へ新たな挑戦をしていってほしいものです。

あるときは人を支え、あるときは人に支えられていいと思う。日頃はおうちの方、地域の方、あるいは先生方に支えられていいと思う。子どもの頃は支えられる割合が大きく、それがだんだんと支える割合が大きくなり、そして、また、支えられる割合が大きくなる。それも自分らしさを大切にすることと同じことです。

今後も、「自分らしさを大切にすること」「人の気持ちを考えた言動をすること」を大切にしていってほしいと願っています。

(令和2年3月13日、福岡市立日佐小学校で行われた修了式にて)

# One day, [ワンデー ワンモーメント] one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ

Photo・Text：Tomoko Hidaki

## 11 枚目 羽音

船のエンジン音に混ざって「ファサツ」という鳥の羽音が間近に聞かされた。思わず振り返ると、鷗（う）や黒い海鳥たちが波しぶきの上を幾重にも重なるように飛んでいる。

エンジンの回転で複雑に渦巻く波の中に、浮き上がってくる魚を狙っているのだろうか。何度もざぶんとダイブしては、また空に戻り、グライダーのように粘り強く船を追いかけてくる。一羽一羽、それぞれの

タイミングで漁をしている姿は、軽やかで迷いがなく、シンプルで力強い。波の青は、ひと言では言えない明るく深い藍色で、白い鷗の羽先を染めているようにも思えた。

今日の前にある毎日を、ただ懸命に生きているだけで尊いことを思い出させてくれる一瞬だった。



## ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会(JPS)、日本舞台写真家協会(JSPS)会員。  
米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォト  
を中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭の  
オフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。  
<https://hidaki.weebly.com> Instagram:tomokohidaki\_2





— SDGs 特集 —

# Think Globally, Act Locally

Vol. 1

## 可能性を引き出すアプローチ

高橋陽子 (ダンウェイ株式会社 代表取締役社長)

“Think Globally, Act Locally”——地球規模で考え、身近なところから行動を起こす——。

よりよい未来をつくっていくために、私たち一人一人にできることは何か？

この特集では、さまざまな分野の方にお話を伺いながら、そのヒントを探ります。

本特集の第1回は、障害のある方への就労支援や特別支援教育プログラムを展開する

ダンウェイ株式会社より、高橋陽子社長にご登場いただきました。



Profile

高橋陽子 (たかはし・ようこ)

数社の企業総務・人事を務めた後、息子の障害をきっかけに、2010年社会保険労務士事務所を開業。障害者を取り巻く大きな社会的課題解決のため、2011年ダンウェイ(株)を設立。障害者の能力の可視化を行う、キャリアサポートカルテ「シームレス パディ」(特許取得)を開発し、障害のある子どもから大人の就労支援まで切れ目のない支援を実施し、実績を出す。さらにインテル(株)と協働し、「ICT治具」を開発。中小企業支援と同時に障害者の新たな職域拡大を目指す。2016年度全国商工会議所「女性起業家大賞」受賞。

<http://www.danway.co.jp/>

## オンラインを活用した支援

—— 障害のある方の就労支援や放課後等デイサービスなど幅広い事業を展開されていますが、どのような方が通っていらっしゃるのですか？

高橋陽子 (以下、高橋) : もともと重度の知的障害のある息子の存在がきっかけで立ち上げた会社なので、まずは知的障害の方をメインの対象として始めました。2011年から事業を始めて、現在は精神障害や発達障害、身体・内臓疾患のある方なども来られています。18歳以上は能力別に3つのクラスに分けて支援を行い、雇用マッチングにつなげていきます。放課後等デイサービスは中高生を中心に、小学校6年生から受け入れています。

—— 新型コロナウイルスの影響で利用者の通所が難しい状況だとお察ししますが、支援はどのように継続されているのでしょうか？

高橋: ダンウェイの事業は、どんな場所でも変わらずにできることを目指しています。昨年4月の緊急事態宣言の際には、100%在宅支援【写真①】に切り替え、サービスを継続しました。宣言が解除されたあとも、通所と在宅支援を組み合わせる



【写真①】在宅支援の様子

ハイブリッド型【写真②】で行っています。はじめはオンライン対応が難しい利用者もいましたが、練習して今は皆できるようになりました。

— 100%在宅支援が可能というのは驚きました。

高橋：やればできます。オンラインの課題は機器の操作だと思われがちですが、大事なのは個別支援計画なのではないかと思います。学校でいえば個別教育計画にあたるものです。一人一人の状態や課題を把握して具体的な個別支援計画をもってれば、場所が変わってもその人に合った支援を継続できます。コロナ禍で、そうした本筋論がはっきり見えてきたように感じています。



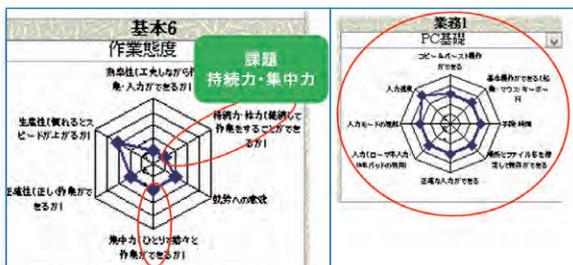
【写真②】ハイブリッド型の支援。講師がリモートで指導する

— 支援の内容は、全てオンラインで指導が可能なものですか？

高橋：オンラインのみで行う教材もあれば、利用者が手元に物を置きオンラインでつないで学ぶ場合もあります。集団でできる人、1対1のほうがよい人などさまざまですが、個別支援計画があればすぐに想定ができます。ありがたいことにオンラインは場所にこだわらずつながることができる。県を越えてトレーニングしてほしいという依頼も来ています。言葉の壁をクリアできたら国も越えられますよね。

— 支援にあたり特に大切にされていることは何ですか？

高橋：「アセスメント（評価）」が私たちの本題です。会社設立以来、障害のある人たちの「能力の可視化」を追究してきました。定期的なアセスメントを行って、その人のどの部分が伸びたのか、どんな課題があるのかを可視化し、カルテ【図1】を作って企業とのマッチングやトレーニングに活用します。適切な雇用につなげるには、客観的な能力の可視化が鍵なのです。



【図1】キャリアサポートのためのカルテ“シームレス バディ”

## ダンウェイ流アプローチ

— 障害のある方と接する際に心がけることや、支援のコツなどがありますか？

高橋：私たちが生きている社会は、言葉でのやり取りがベースになっていますが、特別支援教育においては言葉がハードルになることも多いのです。このピラミッド【図2】のように、言葉は「概念」が理解できたうえで獲得されるものです。そのため、相手がどの程度の概念をもっているのか把握することが重要です。例えばダンウェイの利用者の9割ほどは、上下・左右の概念が分からない、あるいは苦手です。それを知らないままアプローチしても難しいですね。



【図2】発達のプロセス

— 概念の理解度を把握したうえで、アプローチを考えるとということですね。

高橋：例えば「赤いボールペン10本持ってきて」と指示されたとなると、「赤」「ボールペン」「10本」という概念が分かって初めて、持ってくることができます。もし、この中で1つでも分からない概念があれば持ってこられません。概念があっても耳からの言葉で情報が伝わらない場合には、指示の仕方を変える必要があります。視覚情報なのか、その場合は文字なのか、絵なのか、どのような手段であればキャッチできるのか分かれば、コミュニケーションが可能になるんです。

— 障害にもいろいろな種類がありますが、特性に合わせたトレーニングメニューの例を教えてください。

高橋：例えば自閉症スペクトラムの特性がある人は、物事の見通しが分かるとスムーズに動けます。何時に何をしてゴールは何なのか、という見通しが必要なので、こうした個別のスケジュール【写真③】を用意します。スケジュールには、できる限り情報量を少なくすることがポイントです。もう一つ、アナログ時計が読めず、時間の量が分からない場合には、タイムタイマー【写真④】を使います。時間を設定すると赤い部分が減っていく。こうした終わりが見えるものを活用してトレーニングをすると、持続力や集中力が上がってくるわけです。今まで15分もた



【写真③】スケジュールが書かれたプレート

かった人が、30分、1時間、集中できるようになる可能性が出てきます。

### — どんなトレーニングが有効だったのかが分かったら、同じような特性のある人にも応用できそうですね。

高橋：その人に合った合理的配慮や教材をインプットして、期間ごとに持続力・集中力を測り、その変化をデータに残しています。それを積み上げ、AIに深層学習させることで、似たタイプの人が来た場合にゼロから始めるのではなく、「このタイプに有効だったこのセットを使ってみよう」と提案してくれるツールを開発中です。将来的には学校現場でも役立ててもらえたらと思っています。



【写真④】タイムタイマー

### — AIを活用！ そうしたツールがあれば先生どうしの引き継ぎなどもスムーズになりそうです。

高橋：引き継ぎ書を読んでもなかなか難しいですし、ゼロに近い状態から始めるのは負担も大きい。先生方はほんとうに忙しいので、私たちのような学校現場と隣接する機関が役割分担し、後押ししてあげるとよいのではないかと考えています。

## 自信をもって表現できる場を — 特別支援教育と音楽科

### — 特別支援教育における音楽科の役割や可能性について、お考えをお聞かせください。

高橋：特別支援教育と音楽科は親和性があると思います。子どもたちは楽しければ楽しい表現をしますし、つまらなければつまらない表現をしますよね。最も分かりやすい教科です。そして、演奏したい楽器を選んだり、歌を歌ったり、その子の特性に合わせたツールを与えやすい。自分で選べる子には「選ぶ」という機会をつくることができますし、選んだ楽器で「できた！」と実感することで自己肯定感が生まれます。「できた！」が積み重なると安心して能力を発揮できるようになりますよね。

### — 合奏などを通して自分の役割を認識する経験もできます。

高橋：「自分の役割はこれなんだ」と認識できると自信が付いて、仲間とのチームづくりもできるようになります。こうしたスモールステップが、その先にある「自立の力」にもつながっていきます。特別支援教育にいる子どもは、他の子どもたちよりも時間や回数がかかってしまう。だから、怒られてばかりで自信をなくしている子どもも多いんです。ほめられる機会がないまま、コミュニケーション不良になってしまうケースもあります。音楽科には、そうした子どもたちが自信を取り戻して、自分自身を表現できるような機会・役割を期待しています。

### — 心を閉ざしてしまった子には、どんな声掛けをするのがよいでしょうか？

高橋：子どもの行動には意味があります。言葉でやり取りするのが苦手で不安定になってしまうとか、手を出してしまうとか、いろいろな意味があると思うんですよ。この子にはどういう特性があるのか、バックグラウンドも含めて観察しておく必要があります。背景には、大人や友達との関係、見えにくいけれど家族との関係も含まれているかもしれません。問題行動の瞬間だけを捉えて「ダメでしょ」と叱るのではなく、「こういうときはこう言うんだよね」と具体的に示す、もしくは一緒に改善案を考えることがセットであってほしいと思います。

## 「障害者」という概念のない社会とは

### — 日本の現状をふまえて、これからどんなことを実現していきたいですか？

高橋：障害のある人は日本の人口の7.6%なので、日本人の約9割は身近に触れ合う機会がないかもしれません。平成19年に校内の支援学級の設置が義務化されたことで、若い世代においては、障害のある人に全く会ったことがないというケースは減ってきていると思います。一方で、それ以前に学校を卒業した世代の多くはそのような環境ではなかったので、「障害があったら仕事はできないだろう」と思いがちです。障害があろうとなかろうと誰でも、得意なことと苦手なことがありますよね。客観的な能力の可視化を行いながら、誰もが得意なところを活かして働ける機会をつくっていきたいです。

— ダンウェイ様のホームページに、「障害者」という概念のない社会を目指すという言葉が掲げられていますが、具体的にどのようなイメージなのでしょう？

高橋：障害者の「障害」という漢字は誰から見たものか、という点にこだわっているんです。本人の中に障害があるわけではない。ですので、障害を「もつ」という言い方もしていません。本人が「もつ」ものではなくて、「ある」という言い方をします。自分の外に障害が「ある」という見方です。障害というのは本人ではなく社会側にあると捉えているんです。世界的な考え方を引用すると、「個人要因に環境要因が加わって障害なのだ」ということです。

— 社会が変われば、「障害」自体がなくなるといことですね。

高橋：具体的に言うと、正しい理解を得られて、誰もが生きやすい環境になれば、障害はなくなっていくのではないかと考えています。障害は「もつ」ものではないので、社会が変われば障害は「ない」となるんですね。分かりやすい例ですと、車椅子の利用者は街全体がフラットな道になれば障害はなくなる。視力が低下した人がメガネをかけたりコンタクトレンズを着けたりすれば障害ではなくなる。見えるようになれば障害はないですね。「障害者」という概念をなくしていくには、社会側の障害や環境的な障害をなくしていくこと。そのために、これからもチャレンジを続けていきます。



スケジュールに沿って学ぶ中学生

## SDGs とは？

### Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)

2030年までに貧困や飢餓、福祉、教育、ジェンダー、エネルギー、気候変動、平和的社会等の課題に対して解決策を見だし、持続可能でよりよい世界を目指すための国際目標です。国連サミットで決められた17のゴール・169のターゲットで構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



上野耕平の  
CROSSING [クロッシング]

第9回

唯一の定期運行夜行列車！  
サンライズ瀬戸・出雲



品川駅で撮影

先日廃止が発表された夜行快速「ムーンライトながら」。東京〜大垣間を長年結んだこの列車は大垣夜行という愛称でも聞いたことがあるかもしれない。コロナ禍により昨夏から運行がないままの終焉を惜しむ声が各方面から聞こえてくる……。

無くなつてからでは遅い、そう、今ある夜行列車に乗ろう！ 僕自身も何度も利用しているサンライズエクスプレス。東京〜出雲市・高松を毎日結ぶ最後の定期運行夜行列車だ。ホテルのような快適さが売りの個室を中心とした車内。シャワーも付いている。寝るもよし、起きて夜汽車の車窓に黄昏るもよし……。この選択に悩めるのも、おそらくこの列車が最後。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

第28回日本管打楽器コンクール サクソフォーン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウィンドオーケストラコンサートマスター。

Information

◇CD『アドルフに告ぐII』（日本コロムビア）[3,000円＋税/COCQ-85478] が好評発売中。〈収録曲〉藤倉大『フェノウエノ』\*、逢坂裕『ソプラノサクソフォーンとピアノのためのソナタ エクスタシス』、デュクリュック『ソナタ嬰八調』、マルタン『バラード』、トマジ『バラード』〈演奏〉上野耕平（サクソフォーン）、山中惇史（ピアノ）、林英哲（太鼓奏者）\*

編集部メモ

サンライズ瀬戸・出雲は山陰エリア・四国エリアと東京を結ぶ寝台特急で、「サンライズ瀬戸」「サンライズ出雲」を岡山で分割・併結して運転している。運行区間はサンライズ瀬戸が東京〜高松、サンライズ出雲は東京〜出雲市。車内は住宅メーカーと共同で設計されており、木の温もりを生かしたインテリアになっている。寝台は全て個室で、サンライズツインやシングルデラックスなど多様な設備が特徴的。



新型コロナウイルスの感染拡大は学校教育に大きな影響を与えており、とりわけ音楽科では「歌えない」「リコーダーが演奏できない」という、学習の根幹に関わる深刻な事態が一部で現実となりました。教育芸術社では、ホームページにて映像コンテンツなどの公開を続けています。今後も音楽科支援の一助となるよう、新しい内容の制作に取り組み、質量ともに充実させてまいりますので、ぜひご活用ください！



Let's check it out!

一教育芸術社ホームページ  
<https://www.kyogei.co.jp/>



## Contents

- 04 [連載] 復興応援企画 人とまちと、その先と — Vol.4  
東日本大震災 10年～リアス・アーク美術館から伝える気仙沼市の現在 山内宏泰
- 09 [連載] 次代につなぐ 校長先生の講話 第8回 西村幸司
- 12 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 11 枚目 ヒダキトモコ
- 14 [新連載] SDGs 特集 Think Globally, Act Locally Vol.1 高橋陽子(ダンウェイ株式会社)
- 18 [連載] crossing 第9回 上野耕平
- 19 [Information] 教育芸術社ホームページのご紹介

### 編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.11をご清覧いただき、ありがとうございます。  
今号は、気仙沼市のリアス・アーク美術館からインタビューをお届けします。  
東日本大震災から10年。巨大なコンクリートの防潮堤がそびえ立ち、  
目に入る景色も変化してきました。  
「芸術や文化を抜きに町を生み出すことはできない」——副館長の山内宏泰さんは  
そう語ります。地域文化を守り次代につなげていくこともまた、復興において  
忘れてはいけないことなのだと、あらためて感じました。  
新連載のSDGs特集では、“Think Globally, Act Locally”をテーマに、よりよい未来を  
つくっていくため、私たち一人一人にできることを考えていきます。  
エネルギーあふれる誌面にご期待ください。  
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、  
心より厚く御礼申し上げます。

### staff

Art Direction & Design (表紙・本文): 中澤美羽  
写真提供: ゲットィ イメージズ  
DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷  
製本: ヤマナカ製本

No. 11

<https://www.kyogei.co.jp/>